

夏休み少年少女名作鑑賞

少年時代から鑑賞眼を養い高めるといことは、将来の人間形成に役立つものが多分にあります。そこで、夏休みの期間に少年層でも理解できうるであろう心に残る映画を選んでここに特集をつくりました。ジュニア版フィルムセンターとして、御家族ともども御利用いただきました

と存じます。
上映は午後3時と6時15分の2回。先着順にて定員239名に達し次第入場を締め切ります。(開館は12時30分。)ヒル・ヨル全館入替え制。一般200円・学生140円・小人100円

ヒル (午後3時開映)			
期	日	題名	製作会社・製作年
8月1日(火)		野ばら(95分)	オーストリア1957
2日(木)		ジャングル・ブック(97分)	イギリス 1942
3日(木)		しいのみ学園(98分)	新東宝 1955
4日(金)		忘れられた子等(87分)	新東宝 1949
5日(土)		原爆の子(98分)	近代映協 1952

ヨル (午後6時15分開映)			
期	日	題名	製作会社・製作年
8月1日(火)		バグダッドの盗賊(110分)	イギリス 1940
2日(木)		お早よう(93分)	松竹 1959
3日(木)		汚れなき悪戯(92分)	スペイン 1955
4日(金)		文なし横丁の人々(97分)	イギリス 1955
5日(土)		少年探偵団(73分)	ドイツ 1931

野ばら

Der schönste Tag meines Lebens

オーストリア=ドナウ・フィルム
1957年作品

脚本=マクス・ノイフェルト、カール・ライター 監督=マクス・ノイフェルト 撮影=ヴァクラフ・ヴィヒ 美術=ヴァルター・シュミードル 音楽=ハインツ・ノイブラント
出演者=ミヒャエル・アンデ(トニ)、パウル・ヘルビガー(少年合唱団の団長)、エリノア・イェンセン(寮母マリア)、パウル・ベージガー(シュミット)、ヨーゼフ・エッガー(ブリュメル老人)、リヒャルト・アイブナー(ケッラー教授)、トーマス・ヘルビガー(ブリュメル)、ウィーン少年合唱団 10巻(2617米)日本公開1958年8月23日 スカラ座

<かいせつ>

ハンガリー動乱でオーストリアに逃れてきた孤児のトニ少年が、親切なブリュメル老人に救われ、日曜日の教会のミサでウィーン少年合唱団の美しい歌声に魅せられて合唱団入りを夢みるようになり、念願叶って団員となって東チロルの山荘へ合宿練習に出かけるが山荘で起った盗難事件の疑いをかけられたものの嫌疑は晴れ、団員たちとアメリカ演奏旅行に出かけるのだった。チロルの美しい自然風景を背景に《野ばら》や《アヴェ・マリア》などなじみのある数々の歌曲に加えて、特にこの映画のために作曲された《陽の輝く日》と《歌声ひびけば》などをウィーン少年合唱団の少年たちが歌って聞かせる楽しい色彩映画である。

バグダッドの盗賊

The Thief of Bagdad

イギリス=ロンドン・フィルム
1940年作品

製作=アレグザンダー・コルダ 製作協力=ゾルタン・コルダ、ウィリアム・キャムロン・メンジース 原案=ラヨシュ・ピロ 脚色・台詞=マイルズ・モールスン 監督=ロードヴィヒ・ベルガー、マイクル・パウエル、ティム・ホイーラン 撮影=ジョルジュ・ベリナール 撮影助手=ローバト・クラスカー 美術=ヴィンセント・コルダ 編集=チャールズ・クライント 音楽=ミクロシュ・ロージャ 出演者=コンラート・ファイト(ジャファル)、サバー(アブー)、ジューン・デュブレ(姫君)、ジョン・ジャスティン(アーマド)レクス・イングラム(大入道ジニー)、マイルズ・モールスン(サルタン)12巻(2970米)日本公開1951年12月23日 有楽座

<かいせつ>

有名なアラビアン・ナイトの挿話にヒントをえた色彩スペクトル映画。バグダッドの王アーマドは宰相ジャファルの奸計で獄に投ぜられたが、獄中でありあったアブー少年に助けられて脱獄したものの、ジャファルの魔法にかけられてアブーは犬に、アーマドは盲目にされる。だが、アブーは大入道ジニーの助けをえてジャファルに復讐する。おなじみの空飛ぶ絨氈や大入道のトリックも巧妙で、色彩トリック映画としては楽しく見れる佳篇となっている。

ジャングル・ブック

Jungle Book

イギリス=ロンドン・フィルム
1942年作品

製作=アレグザンダー・コルダ 原作=ラジャード・キプリング 脚色=ローレンス・ストーリング 監督=ゾルタン・コルダ 第二班監督=アンドレ・ド・トート 撮影=リー・ガームス 美術=ヴィンセント・コルダ 音楽=ミクロシュ・ロージャ 出演者=サバー(モウグリ)、ジョーゾフ・キャレイア(バルデオ)、ジョン・クウォール(床屋)、ラファンク・パリア(学者)、ローズマリー・デ・キャンプ(メシュア)、パトリシア・オラーク(マハラ)12巻(2904米)日本公開 1951年6月1日 日本劇場

<かいせつ>

インド生まれの英国の作家兼詩人で、1907年のノーベル文学賞を受賞しているラジャード・キプリング(1865～1936)が、1894年に発表した同名の冒険小説の中の《狼少年》を映画化したカラー作品。猟師ラオは村を襲った猛虎シエア・カンに食い殺され、彼の赤ん坊はその騒ぎでジャングルの中へ迷いこむ。狼の洞窟の中で眠った赤ん坊は狼に育てられてモウグリという逞しい少年に成長する。シエア・カンに追われて部落に近づいたモウグリを母親は本能的に自分の子と悟り育てるが、ジャングルに宝庫があることを知ったバルデオが彼をわざとジャングルに逃して跡をつけ宝庫の所在を発見したものの仲間割れしてジャングルに火をつけたため、モウグリは象に乗ってかけつけ母親を助ける。インド生まれの俳優サバー(1924～63)が『バグダッドの盗賊』について大活躍をみせてくれる色彩娯楽篇。

お早よう

松竹大船1959年作品

脚本=野田高梧、小津安二郎 監督=小津安二郎 撮影=厚田雄春 美術=浜田辰雄 音楽=黛敏郎 出演者=佐田啓二(福井平一郎)久我美子(有田節子)、笠智衆(林敏太郎)、三宅邦子(妻民子)、設楽幸嗣(長男実)、島津雅彦(次男勇)、杉村春子(原口きく江)、田中春男(夫辰造)、白田肇(息子幸造)、沢村貞子(福井加代子)、高橋とよ(大久保しげ)、竹田法一(夫善之助)、藤木満寿夫(息子善一)、東野英治郎(富沢)、長岡輝子(妻とよ子)大泉滉(丸山)、泉京子(妻みどり)、須賀不二夫(伊藤先生)、三好栄子(原口みつ江)、殿山泰司(押売り)、7巻(2570米)5月12日封切

<かいせつ>

小津監督は、戦前のサイレント期に「生れてはみたけれど」という名作を作っており、父が上役にベコベコしているのを見た子供が訳もなく父親に反抗するという、サラリーマン人生の悲しさを見事に描いてみせた。この作品でも向う三軒両隣の家族の付き合いの中で、親と子供のやりとりが、小津監督一流のユーモラス性が数多く折りこまれて描かれている。子供が、どうして大人はお早よう、今日は、今晚はなんてつまらないことばかり言うんだという反抗に、父親が、そう言うことが人間と人間の間をなめらかにする油のようなものなんだと優しく悟すあたり、何気ない日常生活を常に描いていた小津監督の、これは軽妙で快い喜劇の佳作である。

しいのみ学園

新東宝1955作品

原作=山本三郎 脚色・監督=清水宏 助監督=石井輝男 撮影=鈴木博 美術=鳥居塚誠一 音楽=斎藤一郎 出演者=香川京子(渥美かよ子)、宇野重吉(山本先生)、花井蘭子(妻美子)、河原崎健三(長男有造)、岩下虎(次男照彦)、島崎雪子(田中先生)、竜崎一郎(村田三吉)、毛利充宏(村田鉄夫)、葉山葉子(照子)大野佳世子(みつ子)、松井晴志(作郎)、渡辺司(久男)、新倉一夫(時雄)、林三重子(節子)服部真佐子(美子)、伊達信(医師)、大森義夫(霊波道場主)11巻(2727米)6月28日封切

<かいせつ>

この原作は、福岡学芸大学の山本三郎教授の実話にもとづいたもので、当時のベストセラーとなった。小児マヒにおかされた子供のために、大学教授の地位を去り、全財産をなげうって、そういった子供のための施設をつくり、病気そのものの快復と、ひ屈になりがちな心の治療に情熱をもちやす々と子供の交流を描いたものである。ややセンチメンタルな部分が多く、当時多くの人の涙をさそい、子供たちがうたう《しいのみの歌》がよく唄われた。

汚れなき悪戯

Marcelivo, pan y vino

スペイン=チャマルティン1955年作品

脚本=ラディスラオ・パホダ、ホセ・マリア・サンチェス・シルバ 監督=ラディスラオ・パホダ 撮影=エンリーケ・ゲルネル 美術=アントニオ・シモン 音楽=パブロ・ソロサバル、パブロ・ソロサバル・ジュニア 出演者=パブリート・カルボ(マルセリーノ)ラファエル・リベリエス(僧院長)、アントニオ・ピコ(アエルト神父)、フーアン・カルボ(パピラ神父)、ホセ・マルコ・ダボ(ハスカル)、フェルナンド・レイ(フライレ)11巻(2494米)日本公開1957年1月15日 テアトル東京

<かいせつ>

スペインのある小さな村の丘の上に建つ僧院の僧侶たちに拾いあげられて五歳になったマルセリーノ少年は、純真無垢ないたずらっ子で僧院内ではアイドルとなっていたが、祭の日、少年の悪戯で混乱が起こり怪我が出たため、かねてから僧院をよく思っていなかった村長から僧院の退去を要求される。納屋に隠れた少年はそこで十字架のキリスト像を発見し、悲しげなその像にパンやブドウ酒を運んだ。すると奇蹟が起こり、キリスト像は天国にいる母に会いたいという少年の望みを叶え、少年を安らかに死なせてやる。少年をとりまく光の輝きに村人たちは奇蹟をまのあたりにし、僧院も無事に収まる。当時6歳のカルボ少年の愛くるしさと奇蹟を素直に表現したパホダ監督の情感溢れる演出によって観る者にほのぼのとした心温まるものを感じさせる佳篇となっている。

忘れられた子等

稲垣プロ・新東宝1949年作品

原作=田村一二 脚本・監督=稲垣浩 撮影=安本淳 美術=堀保治 音楽=西梧郎 出演者=堀雄二(谷村清吉)、笠智衆(杉田校長)、泉田行夫(岡野先生)、岩田直二(古山先生)、葛木香一(校医林田)、浅野光男(川田先生)、葉山富之輔(小使)、松浦築枝(次郎の母)、滝沢静子(正三の母)、木下サヨ子(亀一の母)、宮川喜美枝(田鍋先生)、寛田浩一(次郎)、上野和彦(正三)、寺川隆秋(亀一)9巻(2349米)10月4日封切 ベスト・テン第5位

<かいせつ>

前年に、名作「手をつなぐ子等」を映画化した稲垣監督が、同じ原作者の作品を自から脚本化し、映画化した姉妹篇である。前作では一人の知恵遅れの少年を中心に、彼を暖く見守る教師や友人との交流が、ユーモラスなタッチの中でいねいに描かれている。この「忘れられた子等」では、知恵遅れの子供たちが集められた特殊学級を舞台に、そこへやってきた新任教師と先生とのやりとりが描かれており、その若い教師がいろいろな難問に出合いながらも、生徒たちの純粋な気持ちを次々に理解していくという、稲垣監督独特のやさしさに包まれた作品となっている。大人の目でとらえた無理な子供の姿ではなく、子供の世界に身を置いてそこから素直な気持ちで描いたところにこの作品のさわやかさがある。

文なし横丁の人々

A Kid for Two Farthings

イギリス=ロンドン・フィルム
1955年作品

原作・脚色=ウルフ・マンクウィッツ 製作・監督=キャロル・リード 撮影=エドワード・スケーフ 美術=ウィルフリド・シングルルトン 音楽=ベンジャミン・フランケル 出演者=シリア・ジョンス(ジョナンナ)、ジョナサン・アシュモア(ジョー)、ダイアナ・ドース(ソニア)、ジョー・ロビンス(サム)、デーヴィッド・コソフ(カンディンスキー)、ブレンダ・デ・バンジー(レディ・ルビ)、プリモ・カルメラ(バイスン)10巻(2635米)日本公開1955年7月8日 丸の内ピカデリー

フィルムセンター

<かいせつ>

ロンドンの裏街イースト・エンドの一角。仕立屋カンディンスキー老人の店の二階に母親と間借りしているジョー少年の願いはアメリカに出稼ぎに行っている父親に会いに行くことであり、カンディンスキー老人の願いは大きな蒸気プレスを入れることであり、店の職人で筋肉美を誇るサムは4年越しの恋仲の洋装店の店員ソニアと結婚するのが願いである。みんなのなかなか満たされない願いをジョー少年は或る日手に入れたおでこに小さな角が一本だけ生えた子山羊をかなえてくれるものと思いこむ……ジョー少年と一角獣に焦点をあわせながら、ロンドンの裏街に住む善意の人たちの生活の哀歓を、『第三の男』のキャロル・リード監督が、微笑ましくカラーで描きだした心あたたまる佳篇。

原爆の子

近代映画協会・劇団民芸1952年作品

製作=吉村公三郎 脚本・監督=新藤兼人 撮影=伊藤武夫 美術=丸茂孝 音楽=伊福部昭 出演者=乙羽信子(石川孝子)、滝沢修(岩吉爺さん)、清水将夫(孝子の父)、宇野重吉(孝司)、多々良純(労務者)、斎藤美和(森川夏江)、下元勉(その夫)、伊達信(芳夫の父)、細川ちか子(孝子の母)、北林谷栄(おとよ婆さん)、高野由美(芳夫の母)、小夜福子(教会員)、東野英治郎(馬喰)、寺島雄作(木島浩造)、英百合子(妻おいね)、殿山泰司(船長)、山内明、芦田伸介、奈良岡朋子、垂水悟郎、佐々木すみ江、大滝秀治、柳谷寛、10巻(2685米)8月6日封切

<かいせつ>

長田新が編集した作文集《原爆の子》を、新藤兼人が一人の女教師が昔の園児を訪ねるとい構成で映画化したものである。世界で最初の原爆が広島に投下され、それに生き残った女教師が数年後に、瀬戸内の小島から当時勤めていた幼稚園の園児に合いに広島へやってくる。そこで彼女が見たものは被爆者の悲惨さもあることながら、親兄弟を亡くした幼い子を取りまく厳しい現実だった。その様子をドキュメンタリー風につづって感動をよび、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭で平和賞を受賞。原爆問題を真正面からとりあげた、これは初めての劇映画である。

少年探偵団

Emil und die Detektive

ドイツ=ウーファ1931年作品

原作=エーリヒ・ケストナー 脚色=ビリー・ヴィルター 監督=ゲルハルト・ランプレヒト 撮影=ヴェルナー・ブランデス 美術=ヴェルナー・シュリヒティング 音楽=アラン・グレイ 出演者=ケーテ・ハーク(ティシュバイン夫人)ロルフ・ヴェンクハウス(その息子エミール)、オルガ・エンゲル(祖母)、インゲ・ラントグート(ポニー・ヒュッチェン)、フリッツ・ラスプ(山高帽を被った男グルンゲイス)、ルドルフ・ピーブラッハ(警備員エッシュケ)、ハンス・ヨハヒム・シャウフス(ラッパのグスタフ)、ハンス・リヒター(準)フーベルト・シュミッツ(先生)8巻(1968米)日本公開1934年5月24日 武蔵野館

<かいせつ>

世界各国で翻訳され少年たち間で愛読されているエーリヒ・ケストナーの児童小説《エミールと少年探偵団》を映画化したものの。ベルリンに住む祖父のもとへお金を届けるため上京したり少年が、列車の中で同席した男に盗まれたお金を取返すべく、ベルリンの少年たちの協力をえて見事な組織的探偵活動を展開の末、お金を取戻すまでが、ベルリン市街の簡潔なドキュメンタリー・ショットを交えながら軽快な筆致で描きだされている。冒険心にかきたられた少年たちが、探偵気どりに展開する大捜査網の行き届いた活動ぶりの中に、ドイツ人特有の組織力の才能の一面をかいま見ることができるといえよう。